

日本の石造物（灯籠・塔・添景物）の発生・変遷・分類*

The Occurrence, Transition, Classification of The Articles made of Stone in Japan

田中 邦熙** 打谷 久義***

By Kunihiro TANAKA, Hisayoshi UCHITANI

概 要

日本には石垣・石橋など以外にも、灯籠・塔・添景物・墓石・碑などおびただしい数の石造物が存在するが、これらの工学的研究がなされたことは非常に少ない。本研究は、主として石造の灯籠を中心に塔・鳥居・狛犬などの添景物の歴史・変遷・分類などについて現地踏査・文献調査した結果を取りまとめたものである。今回の調査から、次のようなことが明らかになった。

①石灯籠は日本で考案されたものではなく仏教伝来とともに百済から伝えられたものであるが、今日の多様な形状は日本で創り出されたものである。奈良時代初期ごろは仏寺の正面に献灯器として一基だけ設けられたが、平安時代になり神社にも導入された。室町時代以降に左右二基一対の形となり、室町時代の中期以降、「茶人」たちが茶庭に導入し、利休形などの新しい形へ発達した。石灯籠の文化財的・美術的価値は否定できないが、現代ではさらに時代に即応するように質的にも思想的にも変化して、公共空間や住宅に取り込んでいくことが期待される。②石塔・鳥居・狛犬などの石造物も、石灯籠と同様、それぞれに興味深い問題が山積している。日本の石造物は、文化財としてのみではなく、造形的にも重要なものであることが確認された。

1. まえがき

日本には 石垣・石橋など以外にも、灯籠・塔・添景物・墓石・碑などおびただしい数の石造物が存在する。しかし石垣・石橋以外では、工学的研究がなされたことは非常に少ない。

本研究は、主として石造の灯籠を中心に塔・鳥居・狛犬などの添景物の歴史・変遷・分類などについて、参考文献 1)~10)などを分析整理し、また現地踏査により確認されたことなどを取りまとめたものである。

2. 石灯籠

(1) 灯籠の起源と変遷

「火」は、人類の歴史上古今東西を問わず、神聖なものとして扱われてきた。穢れを清め、不浄を滅し、四方を照らすものとして、宗教的に扱われてきた。このような貴重な火を絶やさず、常夜灯として点灯し、神仏に献ずるために考えられたものが灯籠である。

日本には、仏教が渡来する以前から神社はあったが、「宗教」と定義されるものは存在しなかったといわれている。この神社は宗教の対象ではなく、本殿は無く、山川海・森林などの自然そのものを神体とし、神格化して敬っていた。従って献灯することもなく灯籠のような施設は必要なかった。

仏教が日本に伝えられたのは、538（欽明 13）年（^{ぼこ}戊午説）

で、百済国からであり、その後仏教建築も渡来人により伝えられた。当時の百済国の仏寺の様式では、石灯籠は仏堂前に一基のみ設けられていて、日本で造られた仏寺にもその様式が伝えられた。この仏寺の正面に献灯器として設けられた石灯籠が、約 250 年後平安時代に神社の前にも導入されたと考えられている。その約 300 年後室町時代になり、それまで一基であったものが左右二基一対の形となった。

これらの灯籠の作者は仏像彫刻の工人と関係があり、仏像の

初期のものは木彫りであったが、後に石造^{いしづくりのむらじ}連といわれた工人が軟質凝灰岩を用いて石仏などを彫刻し、鎌倉時代になって花崗岩が用いられるようになり、石灯籠・石塔・石碑なども彫刻するようになった。ここで石灯籠は、献灯のために社寺に限定して用いられたもので、公道・市場などの照明は高灯籠で行われており、鎌倉・室町時代の枯山水や回遊式庭園には石灯籠は用いられていない。平安時代の庭園の夜間照明は、灯籠でなく^{かがりび}篝火が用いられていた。それが庭園に用いられるようになったのは、茶人が茶庭での茶会に導入し、さらに茶庭にふさわしい形を考案し多様化して、その後本歌（オリジナル）が模刻され大量生産されるようになったと考えられる。

なお中国・朝鮮に現存する石灯籠は、金堂・阿彌陀堂などの前に一基だけ設けられているが、これらには照明という意味は含まれていない。

* keywords : 石灯籠、石塔、鳥居、狛犬

** フェロー 博(工学) (社)日本公園緑地協会研究顧問

(〒192-0371 八王子市南陽台 2-33-16)

*** 打谷石材株式会社 代表取締役

(2) 灯籠の目的

灯籠の目的は、次のように分類整理される。

- a). 献灯
- b). 照明 (美しく見せる・姿を見せる・物の存在を想像させる・危険防止)
- c). 誘蛾 d). 寓意 e). 墓標 f). 供養 g). 記念
- h). 崇拜 i). 輪廻塔 j). 装飾

(3) 石灯籠の構成と各部の変遷

灯籠の基本形状は、図-1 に示すような、宝珠・笠・火袋・中台・竿および基礎の6個の部分を組み上げて一基の建造物の形に造り上げているが、さらにある部分を省略したりして変形型などが造られた。しかし火袋だけは全体の形状に異同があっても欠くことはなく、この火袋が灯籠の中心となっている。すなわち火袋には、宗教的な意味合いがあると考えられ、外山英策氏は、次のように想定した。

「石灯籠は、池の中から立ち上がった蓮の花の上に仏が座し、それを保護して火袋・笠がある形である。水際を示すものが竿の節であり、中台と基盤の彫刻の蓮の花の花弁は対称形となっている。」

石灯籠の時代鑑別の要点を形式の面から概念的に言えば、奈良時代のものは八角形、平安時代から今日までは六角形であるが、鎌倉時代末期から室町時代にかけては四角形のものが多く見られる。

次に上述の6部分の詳細を整理する。

a). 宝珠

石灯籠の最上部の笠の上の中心にあり、球形が多く、上方が少し尖っている。その下には蓮の花のつぼみを象った請花がある。桃山時代以降になると、尖り方が次第に鋭くなる。

b). 笠

火袋を雨水から防護していると見なされ、六角・四角が多いが、八角・円形のものもある。上面は曲線となっているものが多く、照り (上面に反っている)・むくりまたは起こり (下面に反っている)・波形 (上方で反りその下方で照り) の形をとる。

軒が接するところには、装飾の蕨手 (渦巻き) があり、上方に巻き込んでいる。鎌倉時代の笠は、蕨手の巻き数は少なく力強いが、江戸時代になると、軒は薄く反りは弧状になり蕨手の巻き数は増える。

c). 火袋

灯籠の最重要部分であり、断面は四・六・八角または円・楕円で、この中に皿をおき、灯心を燃やした。火袋の火口のな内面には、各種の彫刻があり、火袋の上にはれんじ、下には格狭間が刻まれる。鎌倉時代の火袋は大形であり、桃山・江戸時代のものは小さく、彫刻の厚みが増す。

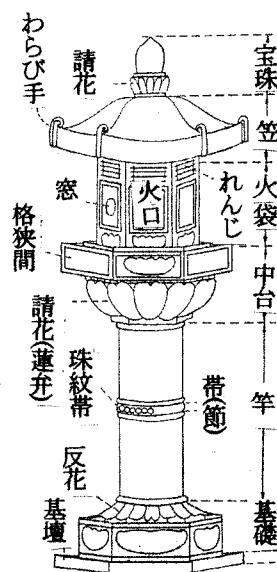


図-1 普通形灯籠の構成と名称

d). 中台

火袋を受ける台で、受台・受棒・受などともいう。基礎と逆な形状で、節を挟んで上下対称となっている。中台は、反花を刻んだ上面・中央・請花を刻んだ下面の三部からなる。鎌倉時代のものは、側面が厚く、格狭間・走獅子が刻まれている。

e). 竿

火袋または中台をうけるもので、標準形は円筒状であり、基礎の中心に立つ。生けこみ形では基礎はなく、直接地中に立つ。異形では一本ではなく分かれてかつ曲折したり、折れ曲がる形もある。円柱のときに限り節 (または帯) が刻まれる。この竿が蓮の葉の軸であり、中央節が水際を意味する。奈良時代の当麻寺のものにはエンタシス (円柱のふくらみ) があり、平安時代の柚木形では、節は上中下の3段あり、鎌倉時代では節に珠紋帯や蓮華紋がある。桃山江戸時代では、珠紋は少なく中央部の節は外側に膨れていて、竹節状のものもある。

f). 基礎

灯籠の最下部分で、基盤・台座・基座・沓石・地輪・下台・苔つきなどともいう。この下に基壇があることもある。基礎の上には反花、その下には格狭間が彫られる。奈良時代興福寺のものでは、蓮弁は一重で曲線が美しい。平安時代のものは、反花は八重で幅が広く、鎌倉時代では、格狭間が刻まれている。桃山時代以降では蓮弁の力が弱い。

(4) 石灯籠の分類

石灯籠は、形態・歴史的変遷・目的用途・設置場所および存在する地域・献灯された社寺名・茶人名などの立場から様々に分類されるが、形態的・歴史的かつ社寺名などによって整理した結果を表-1 に示す。また代表例を写真-1~16に、名

表-1 石灯籠の分類

(作成:田中)

形状			名称	制作時代	特長・記事	所在地	
大分類	中分類	形	No.(別称)			市町村	寺院
I. 普通形	A. 標準形	a. 八角形	1. 当麻寺形	奈良初期	日本最古といわれる。笠は八角、中台共に厚い。火袋は木製。	奈良県葛城市	当麻寺
			2. 袖ノ木形(大黒殿)	平安	六虫石(凝灰岩)で軟質な石。 春日神社境内の1800基の石灯籠の中の最古のもの。手水舎(大黒殿)前の袖木の下にあったので名づけられた。笠・中台共に八角形。基盤は六角。	奈良	金堂前 春日神社若宮社境内 手水舎(大黒殿)前
I. 普通形	A. 標準形	b. 六角形	3. 平等院形	平安	灯袋は二石を寄せたもので、その間が灯口。当初のものは六角の基盤だが、他は後世の補修。石質は米白石(宇治石)で硬い。	京都府宇治市	宇治平等院 鳳凰堂前に一基。
			4. 橋寺形	鎌倉	記録上では日本最古とされ、聖徳太子建立の橋寺の庫裡前にあったが、現奈良県明日香村修復のため非公開。灯袋四面に四天王立像、中台に獅子の彫刻あり。	奈良県明日香村	橋寺 庫裡前
I. 普通形	A. 標準形	b. 六角形	5. 三月堂形	鎌倉	国宝。法華堂形ともいう。 建長六(1254)の銘	奈良県	東大寺法華堂 (三月堂)前
			6. 元興寺(暗灯籠)	鎌倉	当初の形態が良く残されているが、竿・銘文・蔵手の破損著しい。	奈良	元興寺
I. 普通形	A. 標準形	b. 六角形	7. 般若寺形	鎌倉	国宝 笠と竿は明治時代のものであるが、他は当時のもの。	奈良	般若寺 石塔左側
			8. 西円寺形	鎌倉		奈良	法隆寺西円堂 五重塔左
I. 普通形	A. 標準形	b. 六角形	9. 太素形	鎌倉	宝珠は大きく、後世の作。 一般公開していない。	京都市右京区	広隆寺 本坊庭園内
			10. 禅導寺形(珊瑚灯籠)	鎌倉	白大理石 石灯形の塔身に孔をあけて灯袋とした改造形。	京都市中京区	善導寺庫裡
I. 普通形	A. 標準形	b. 六角形	11. 蟬丸形(蓮坂形・時雨灯籠)	鎌倉		大津市	下の社閭蟬丸神社 本殿左
			12. 細川三斎の墓	鎌倉	利休遺愛の品で、秀吉と三斎とが所望したが、蔵手をわざと欠き、三斎に元は灯籠だが、墓石とした。	京都市北区	大徳寺塔頭高桐院
I. 普通形	A. 標準形	b. 六角形	13. 東慶寺朝鮮形	鎌倉	笠の内側に二重タル木が刻まれ、基盤は仏殿の柱の礎石と同じ形。横浜市本牧の三溪園に、鎌倉市の東慶寺にあった仏殿を移設した。	横浜市本牧	三慶園
			14. 蔵戸形(蔵殿・蔵堂形)	室町	灯口の反対側に内窓	奈良	春日神社 蔵戸神社本殿正面
I. 普通形	A. 標準形	b. 六角形	15. 奥之院形	江戸	現在の春日灯籠の原形	奈良	春日神社
			16. 雲卜形	江戸	基礎面に石匠連トの刻あり	奈良	春日神社
I. 普通形	A. 標準形	b. 六角形	17. 白太夫形	江戸		京都市	北野神社 白太夫社前
			18. 灯明寺形	江戸	現在は東京にある。	京都市加茂	灯明寺
I. 普通形	A. 標準形	b. 六角形	19. 小町形	江戸	現在は東京にある。	京都市原	補陀落寺
			20. 南宗寺形	江戸	利休愛用。	大阪府	南宗寺実相庵
I. 普通形	A. 標準形	b. 六角形	21. 蘇杭形	江戸	江戸時代の形式。徳川家霊廟に多い。春日形に近い。		
			22. 蟬鈴形	江戸	善導寺形に似る。	京都	成就院の庭
I. 普通形	A. 標準形	b. 六角形	23. 三角灯籠形	江戸	竿が三角形断面。	京都	成就院の路次庭
			24. 西の屋形	江戸	竿に西屋の銘あり。	奈良	春日神社 お煙道に一基ある。
I. 普通形	A. 標準形	b. 六角形	25. お間形	江戸	本社と若宮との間の道をお煙道といい、その両側に多数並んでいる。 灯袋は本で修復。若宮に最も近くにあり、元享三年(1323)の銘あり。	奈良	春日神社
			26. 宮立形	江戸	灯袋は四方打ち抜き。		
I. 普通形	B. 一部変形形	c. 四角形	27. 神前形	江戸	神前の献灯。竿は下部ほど太い。		
			28. 蓮花寺形	江戸	笠が細長く、傘を半ばすぼめた形。屋根に瓦葺の段が九重ある。 宝珠と笠は後世の作。	京都市左京区	蓮花寺本堂前一对ある。
I. 普通形	B. 一部変形形	c. 四角形	29. 満鑑形	江戸	笠は厚く、むくり。蔵手ない。六角形。		
			30. 太閤形	江戸	六角形。笠その他に菊・桐の紋がある。桃山形もほぼ同じ。		
I. 普通形	B. 一部変形形	c. 四角形	31. 泰平形	江戸	六角形。蔵手は垂直短角柱状。竿は太く筋は上中下にある。		
			32. 利休形	江戸	六角形。笠は上下に長く伸び、笠の屋根はむくり・大形・蔵手あり。 竿は円筒形で短く中央に筋あり。 山寺利休・難波利休・利休白太夫・利休7本・利休千花・利休角など		
I. 普通形	B. 一部変形形	c. 四角形	33. 泉易形	江戸	六角形。笠は薄く、蔵手は縦の半環状。		
			34. 勤修寺形	江戸	高さは低いが、笠は四角形で上むくり。一見雪見形。灯袋は扁平、四角、灯口は四方吹きぬき。中台は細く彫刻無く、竿は角柱など特殊。		
I. 普通形	C. 一部省略形(生けこみ形)	c. 四角形	35. 離形	江戸	利休七哲の一人の古田織部の名による。キリシタン灯籠ともいわれ、隠し標識とか墓石とかいわれる。笠も灯袋も四角形。	京都	桂離宮には7種もある。
			36. 堂灯籠	江戸	基礎は無く生けこみ形。竿は円柱形で太く短い。宝珠ない。 灯袋は前後に四角の灯口あり。足許を照らすもので足許灯籠ともいう。	京都	桂離宮園林堂の東北のものが著名
I. 普通形	C. 一部省略形(生けこみ形)	c. 四角形	37. 草屋形(とま屋形・墓屋形)	江戸	笠の形が農家の屋根のようで、宝珠は無く横の線状。灯袋は単一方形。四角形で台座無く、生けこみまたは置灯籠である。		
			38. 珠光形	江戸	笠は円形。宝珠あり。灯袋は縦長長方形四方打ち抜き、中台・基礎なし。 灯袋と竿は一石で作られ、断面は四角で生けこみ式。		
I. 普通形	C. 一部省略形(生けこみ形)	c. 四角形	39. 大仏形	江戸	笠は小型、四角形。宝珠あり。灯袋も四角形で灯口なし。意は半月と三つ丸形にくみぬき。中台・竿も四角形。正面に文字を刻んでいる。		
			40. 置灯籠形	江戸	基礎・竿がなく、生け込んだり何かの上に置く。漁夫釣形などがある。		
I. 普通形	D. 竿変形形	c. 四角形	41. 廣漢形	江戸	基礎はなく、竿が斜めに出一端は地中に固定。他端は巻いてその上に中台・灯袋などを載せる。多くは水辺に立てる。		
			42. 雪見形	桃山	笠は薄く、勾配が少なく大形で、蔵手などの装飾ない。八角・六角・四角丸形などがあり軽いむくりがある。灯袋は重視しない。	京都市東山	泉涌寺の池泉脇 桂離宮笑雲軒入り口飛び石右側の三角雪見
II. 改造形			43. 琴柱	江戸	竿が二脚のものを言う。脚の断面は方形。	金沢市	兼六園(霞が池)
			44. 寄灯籠	江戸	石灯籠や石塔が破損して廃物状のものを、灯籠の部品として活用。	京都市	大徳寺近くの狐とま庵の遠州好みの灯籠、 大徳寺龍光院の朝鮮等電
II. 改造形			45. 山灯籠(化灯籠)	江戸	灯籠としての6部分はそろっているが、自然石などを組み合わせたもの		
			46. 三光灯籠	江戸	長方形の箱形。笠は扁平で少し上むくり。宝珠はない。足許を照らすもの。 灯袋の長側面に日輪と三日月の窓、短側面に四角灯口の孔あり。	京都	桂離宮笑雲軒前の池の舟付き場の脇にある。
III. 変形形			47. 餅口灯籠(袖形灯籠)	江戸	一石で袖形に作り口の字形をなす。笠は四角形で、少し反りがある。		
			48. 遠州好み	江戸	上の袖形灯籠を少し長く丸みをつけたようなもの。一定の形はない。 遠州好みとか利休好みといわれる。		
III. 変形形			49. 道しるべ形	江戸	形は一定しない。多くは自然石で、円筒・山・こま・フクベ・球形など。 一部をくりぬいて灯袋の灯口をつくり、なかに灯器をいれる。		
			50. 橋杭形	江戸	石の橋杭を廃物利用したもの。必ず加工石で、円筒形である。		

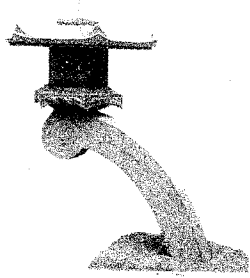


写真-1 (41)
蘭溪形



写真-2 (2)
柚ノ木形



写真-3 (3)
平等院形

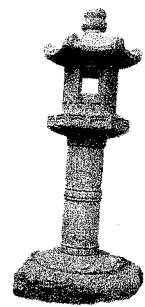


写真-4 (5)
三月堂形

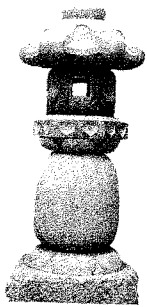


写真-5 (10)
禅導寺形



写真-6 (15)
奥之院形



写真-7 (24)
西ノ屋形



写真-8 (28)
蓮華寺形

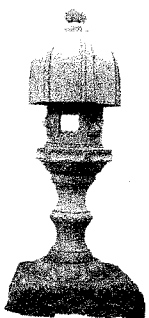


写真-9 (29)
濡鷲形

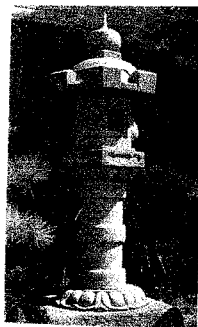


写真-10 (31)
泰平形



写真-11 (32)
利休形

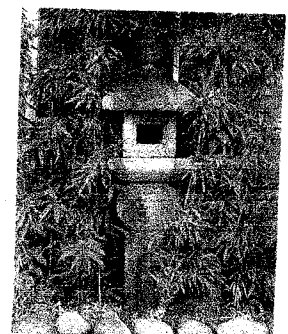


写真-12 (35)
織部形



写真-13 (37)
草屋形

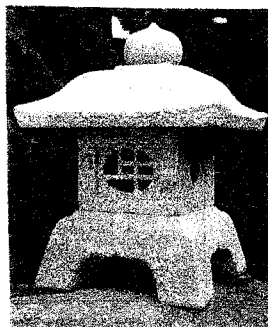


写真-14 (40)
置灯籠形



写真-15 (42)
雪見形 (泉涌寺形)



写真-16 (48)
遠州好み形

(撮影：田中・打谷、2006.2～3)

称欄で付したNo.に対応して示す。石灯籠の分類の確かな根拠となるものは存在しないことも事実である。

a). 形態的分類

形態的には、上述の6要素を基本とする「普通形」・その「改造形」および「変態形」の3種に大別され、普通形は、標準形・一部変形形・一部省略形および竿変形形に区分され、さらに笠の形から八角・六角・四角形に区分できる。竿灯籠・笠灯籠・生けこみ灯籠・置き灯籠という分類も出来る。また、橋杭形・袖形・草屋形などはそのものの名称であり、琴柱形は竿が2脚あるもの、山灯籠は自然石を組み立てたもの、寄せ灯籠は各種の廃物石造品の寄せ集めであることからの呼称である。

b). 歴史的変遷

現存する奈良時代のものは当麻寺形、平安時代のものは袖ノ木形・平等院形と古いものは非常に少なく、鎌倉時代以降のものが大半である。鎌倉～江戸時代のものはオリジナルの本歌とその模刻が非常に多いが、本歌の歴史的前後関係ははっきりしない。

c). 存在場所による分類

春日神社のお間道にあるお間形、神前にある神前形、足許を照らす足許灯籠など。

d). 献灯された社寺名による分類

これが最も多い。

e). 茶人の名による分類

主として庭園用で、利休形・宗易形・織部形などであるが、その茶人が考案したという証拠はない。

(5) 庭園への進出

献灯は社寺に限って行われたもので、一般の照明は高灯籠などであった。庭園の照明は、平安時代では篝火^{かがり}であり、鎌倉室町時代の枯山水や回遊式庭園でも石灯籠が用いられたという記録はない。しかし著名な社寺には石灯籠が寄進されていて、室町時代(1368～1573)の中期以降、足利義政の東山時代(1480～1490)にその形式が整えられた「茶道」の茶人たちが茶庭に導入し、さらに工夫を加え新しい形を考案して、室町時代以降の利休形・織部形・有明形・遠州形などに発達した。しかし茶庭に導入し照明に供してもそれを置く場所が大切であり、「書院造り」への庭が発達してそれに適するように改良され、さらに今日の一般庭園の中にみられるような各種各様の灯籠に進展した。しかし今日では多くは単なる装飾物と見なされている。

(6) 現代の石灯籠

石灯籠に関して、「日本の庭園文化を形成する美的要素の一つであり、それ自体も美術品として優れたものも少なくなく、庭などに積極的に取り入れるべきである」といった肯定的な意見がある一方、「現代とかけ離れた陳腐なもので、日本の庭園の進歩に對しむしろ邪魔なものである」と言った否定的な意見も多い。しかしその歴史的価値・美術的価値は否定することは出来ない。「飛び石」とともに日本庭園に不可欠なものであり、庭を

生かす価値を秘めたものであることは間違いない。

現代の庭で石灯籠が多く用いられるのは日本式庭園であり、そのとき石造美術品として庭の構成要素の一つとして扱われている。この場合石塔籠は、庭を良くするための仕掛けの一つであるという立場と、石灯籠はそれ自体の美を楽しむためのものであり、庭はそのための環境づくりの一つであるという立場の二通りの姿勢がある。いずれにしる今後とも、公共空間や現代住宅の中にそれを取り込み、時代に即応するように質的にも思想的にも変化していくことも必要である。

3. 石塔

石塔の「塔」とは塔婆・卒塔婆の略称で、「集まる」すなわち「積み重ねる」ことを意味する「スツーパー」のなまったものとされる。

塔が初めて建てられたのはインドで、釈迦入滅後仏身を荼毘に付した後遺骨を八分して八か国に分配し、それぞれ塔を建てたのが起源とされる。この塔が仏教東漸に伴い中国に入り、多層塔へと変化し、日本各地の寺院の五重塔になり、石造層塔に変化したとされる。

石塔には、三重・五重・七重・九重・十三重の多層塔、五輪塔、多宝塔、宝きょう印塔、無縫塔(卵塔)などがあるが、これらは一般に仏教に関連したもので、造園の添景に供されるものは少ない。

多層塔が美術品として庭園に据えられるときは、池泉の対岸・樹木の前景など塔身が遠方から見え隠れするような位置が選ばれる。日本で古いものは松香石のような軟石を用いているが、多くは花崗岩であり、日本一の高さのものは宇治川の岸に立つもので十三重である。

4. 石造添景物

a) 石造添景物

庭園の中に小さな石造の添景物を置き、それを見て楽しむという習慣は日本人独特のものである。庭園以外も含めた石造添景物には次のように多くの種類があり、日本独特なものが多い。

鳥居、陰陽石、庚申塔、羅漢像、地藏像、狛犬、亀・鶴・鹿・狸・ガマなどの置物、道しるべ、町石、戒壇石など。

これらの石造物に関しても、文化的・歴史的・技術的研究および美術工芸品としての研究などがなされたことは少ない。しかし灯籠と同様に、それぞれに興味深い問題が数多くある。

b) 鳥居

鳥居の起源は、インドの塔を囲む垣の門のトラーナ、中国の華表、朝鮮の紅箭門などいろいろあるが定説はない。語源につい

ても、「通り入る」の転化で鶏が止まり居る意味、「門居」の転化などがある。鳥居の標準的な構造とその名称は、図-2の通りである。様式は、神明・鹿島・八幡・両部・靖国・春日・稲荷・住吉・山王・三輪などがあり、材料はヒノキ・スギなどの木材、石、金属などがある。現存の鳥居の最古のものは、14世紀初頭の石鳥居(四天王寺)で、そのほかは近世以降のものがある。

c) 狛犬

中国では宮門・陵墓・廟堂の前に獅子の像を置き、守護役とし

た。これが日本に渡来したもので、異国の犬の意味の高麗犬と称し、狛犬となった。日本で神社などに見られる狛犬は神社などの中心的存在ではなくかつ必ず一対である。これは荘厳と淨地守護の目的のためであり、一方が口を開き他方は口を閉じる

あうん阿吽の形である。ア(五十音の初め)は物の理の本体、ウン(五十音の終音)は物の帰着する智の当体を意味する。狛犬の材料も種々であり、また地域性・時代性が強く変形は非常に多い。

5. まとめ

①石灯籠は日本で考案されたものではなく、仏教伝来とともに百済から伝えられたもので、今日の多様な形状は日本で創り出されたものである。奈良時代初期ごろは仏寺の正面に献灯器として一基だけ設けられたが、平安時代になり神社にも導入された。室町時代以降に左右二基一対の形となり、室町時代の中期以降その形式が整えられた「茶道」の茶人たちが茶庭に導入し、工夫を加え利休形などの新しい形へ発達した。石灯籠の文化財的・美術的価値は否定できないが、現代ではさらに時代に即応するように質的にも思想的にも変化して、公共空間や住宅に取り込んでいくことが期待される。

②石塔・鳥居・狛犬などの石造物も、石灯籠と同様、それぞれに興味深い問題が山積している。

日本の石造物は、文化財としてのみならず造形上も重要なものであり、今後とも地道な調査研究を続けていく所存である。

謝辞

本研究を取りまとめるに当り、京都国立博物館の文化財管理官 中村康氏には、貴重な意見を頂きました。ここに謝意を表します。

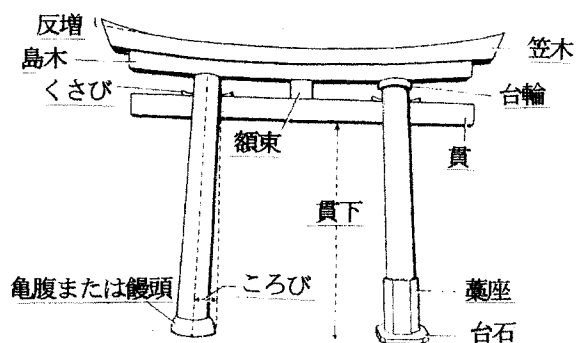


図-2 鳥居の各部名称

参考文献

- 1) 天沼俊一：『石灯籠』、(株)思文閣、1933.12.31
- 2) 川勝政太郎：『燈籠・手水鉢』、河原書店、1942.
- 3) 川勝政太郎：『燈籠 (献呈版)』(株)集英社、1973.2.25
- 4) 上原敬二監修・塚本嘉一著：『図典 石塔と石灯籠』、鎌倉新書、1980.
- 5) 重森完途：『カラー 石灯籠・蹲い』、淡交社、1982.
- 6) 上原敬二：『滝・橋・灯籠・石造物 (庭園入門講座第九巻)』、加島書店、1995.11.20
- 7) 龍居竹之介 (龍居庭園研究所)：『石灯籠の話 (ガーデン ライブラリー④)』、株式会社 建築資料研究所、1992.10.25
- 8) ねずてつや：『狛犬学事始』、(株)ナカニシヤ出版、1994.1.20
- 9) 新人物往来社：『日本(寺院)総覧』、1992.7.6
- 10) 新人物往来社：『日本(神社)総覧』、1992.7.6